



「旅のよろこび株式会社」

「障がいがあっても、なにがなんでも旅行へ行ってください。私は人工呼吸器を二十四時間着けて寝たまゝの状態ですが、飛行機に乗って夢の国へ行ったのですから、絶対にあきらめちゃだめです。」(『100人の旅のよろこび』22頁)

「夢の国」とは東京ディズニーランド。24時間人工呼吸器を離せない女性にとっては、東京ディズニーランドとは手の届かない「夢の国」かもしれない。しかし、驚くべきことに、その夢は実現した。この言葉は、エッセイ集『100人の旅のよろこび』に、その女性が綴った一節である。どのようにしてそれが可能になったのか。

今回ご紹介する「旅のよろこび株式会社」(平成18年設立、平成19年熊本県主催「くまもとUD大賞」受賞)が、それを可能にした旅行会社である。この会社は、上述の女性が語る「夢」のように、障がいや高齢であるという理由で「旅」を躊躇してきた方々のさまざまな「夢」を実現させてきた。娘との同居により、新しい環境で引きこもりがちだった85歳の女性が、「旅のよろこび社」との出会いによって、10年有効パスポートを作り、ヨーロッパ旅行に出かけた。「せっかく作ったから期限まで目一杯使い切らなね。今からが青春よ。」(同10頁)と語る。また同じく、「旅のよろこび社」との出会いによって、車椅子生活の息子とのハワイ旅行を実現させた母が「ハワイ旅行で、何が一番プラスになったかと聞かれたら、私は、『自信』と答えるだろう。この先、一つ一つの積み重ねた経験が、洋一

(息子：筆者注)にとって、どれだけ生きる糧になるか。」(同27頁)と語る。

「旅のよろこび社」は、こうした「旅のよろこび」をどのようにして実現させているのか。事務所のある熊本市飛田に社長・宮川和夫氏をお訪ねして、お話を伺った。



Q. この会社の設立の目的は？

旅は人生の喜びのひとつであり、その喜びを生涯味わっていただきたい。高齢だから、障がいがあるから、人に迷惑がかかるから・・・という理由であきらめがちだった人にも「旅のよろこび」を通じて、自信や生きがいを感じていただきたいのです。

Q. このような会社は全国でも珍しいのでは？

全国ではバリアフリー旅行ネットワークという組織があり、東京、京都、広島、名古屋などに旅行会社がありますが、九州では「旅のよろこび社」のみ。まだまだ少ないし、全国的に知られていません。

Q. UD旅行とは、どのような形で実現されるのですか？

安心・安全を大切な軸として、旅行先の下見を徹底し、多目的トイレや段差、危険箇所の有無をチェック、どこでもトイレを持参し、送迎の手配、入浴用品(シャワーいす、シャ



スイス・マッターホルンにて

ワーキャリー、バスボード、すべり止めマット、セラピーマット、洗面器、足湯用たらい)を用意、車いすも航空機など狭い通路でも使用できる携帯車いすの準備、宿泊施設の段差や部屋の入口の幅、バスルームの広さ、ベッドの高さをチェックし、お食事(きざみ食、ペースト食、とろみ食、減塩食、アレルギー除去食など)を準備しています。つねに、旅行介助ボランティアスタッフが同行し細やかな介助を行っています。私も(宮川社長)ホームヘルパー2級の資格を取得しており、添乗します。

Q. 旅行介助ボランティアスタッフとは？

医療・福祉専門職の方を含む多くのボランティアスタッフが旅行に同行し介助を行います。登録者は熊本県内に180名ほど。全国各地、海外にも協力者がいます。また、年に一度、看護師・理学療法士、視覚・聴覚の当事者等、専門の講師によるボランティア講習を行っています。

Q. これまで、どのような旅行を組織されましたか？

国内から海外までさまざま。海外はヨーロッパやハワイ、カナダでオーロラを見るなど、一生涯、海外に行けないと考えておられた方々が参加しました。「行けるところ」から「行きたいところ」に旅をするというのがコンセプトです。



いさぶろう・しんぺい (肥薩線)

***訪問を終えて**

宮川さんが言われているように、旅は生きがいになり、リハビリの目標になり、介護予防になり、旅友達もでき、大切な人たちとの思い出を紡いでいくことができる。また同時に、介助スタッフも、旅行を共有することで得た新しい可能性や価値観をも共有していく。高齢な方・障がいがある方・旅行介助ボランティアの「旅の喜び」を綴ったエッセイ集『100人の旅のよろこび』(旅のよろこび株式会社)が今年上梓された。その一部が先に引用してきた利用者の言葉の数々である。『「旅のよろこび」に、出会えたことを本当に感謝している。あの熱意ある呼びかけを、絶えることなく、継続して欲しい。」(同28頁)

利用者がここに綴るように、「旅のよろこび社」が行う「熱意ある呼びかけ」によって、今後も多くの潜在的な利用者が新たな可能性に出会えよう。一方で、その「呼びかけ」に、社会全体でどう応えていくかが、私たちに問われているように思える。

(本研究員 萩原修子 文化人類学)